文部科学省委託事業　リーディング DX スクール事業・生成 AI パイロット校事業の取組

相模原市立中野中学校区　―未来の学び創造への挑戦―

急速なデジタル化が進む現代社会において、学校教育もまた大きな変革の時を迎えています。中野中学校区３校は文部科学省より「リーディング DX スクール」、中野中学校は「生成 AI パイロット校」の指定を受け、ICT と生成 AI を効果的に活用した「新しい学び」の創造に果敢に挑戦しています。ここでは、中野中学校区での取組と中野中学校の取組を紹介します。

【リーディング DX スクール事業と生成 AI パイロット校事業】

（リーディング DX スクールホームページ　https://leadingdxschool.mext.go.jp/）

「リーディング DX スクール事業」は、GIGA スクール構想で整備された端末とクラウド環境を、全国の学校が十全に活用するためのモデルケース創出を目的としています。中野中学校区はこの指定校として、特別なソフトウェアに頼らず、標準仕様の汎用ツールを「普段使い」することで、情報活用能力の育成や個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をめざしています。どの学校でも再現可能な実践事例を積み上げ、全国へ発信することが同校区の重要な役割です。

「生成 AI パイロット校事業」は、教育現場における生成 AI の先行的な活用を通じ、効果的な実践事例の創出を行う文部科学省の取組です。指定３年目を迎える中野中学校では、明確な目的意識を持った「活用」へとフェーズを移行させています。生成 AI を安易な検索ツールではなく、生徒の思考を深めるためのツールとして位置づけ、最先端の知見を蓄積しています。

Ⅰ．リーディング DX スクール事業

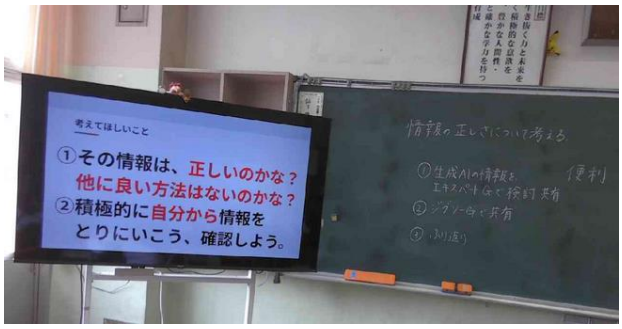
中野中学校区の取組

校区内の学校と連携し「小中一貫」の視点をもって取り組んでいます。中野中学校、中野小学校、津久井中央小学校の３校は、９年間を通じた児童生徒の学びの連続性を重視し、「学びのスタンダード」という協働学習システムを共有しています。今年度は、夏の「小中一貫の日」において、３校の教職員が一堂に会し、ICT 活用の合同研修を行いました。ここでは、デジタルホワイトボードの活用方法について、実践的なワークショップを行いました。小学校段階から、自分の考えをデジタルの付箋に書き出し、友だちの意見と分類・整理したり、関連付けたりする経験を積むことは、中学校でのより高度な探究学習へのスムーズな接続を可能にします。教職員同士が校種を超えて ICT 活用のノウハウを共有し、「どのように使えば子どもたちの学びが深まるか」を議論する場をもつことで、中学校区全体の教育力向上をめざしています。

２.生成 AI パイロット校事業

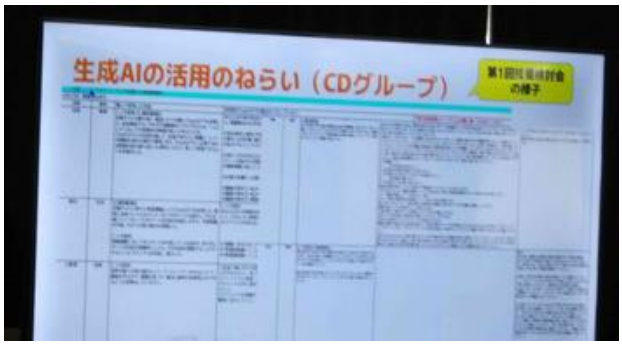
中野中学校の取組

中野中学校におけるリーディング DX スクール・生成 AI パイロット校の取組は、３年目を迎え新たなステージへと移行しています。今年度の最大の焦点は、「AI リテラシーを高めるカリキュラム構築」への挑戦です。中野中学校では、総合的な学習の時間を活用し、体系的に情報リテラシーを育成する「情報の授業」をカリキュラムに組み込みました。ここで生徒たちは、生成 AI の仕組や特性、倫理的な課題について深く学びます。そして、この情報の授業で培われた基礎力をベースとして、他教科等の授業でも日常的かつ効果的に生成 AI を活用する「教科横断的な学び」へと接続させています。



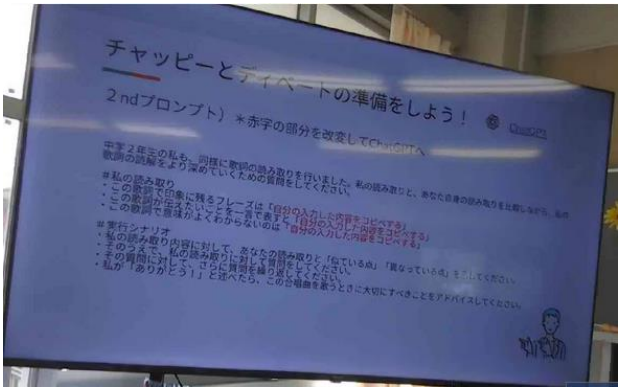
［写真１:情報の正しさについて考える授業］

中野中学校では、生成 AI 活用の目的を[A. 課題解決・対話的学習、B. 多面的な見方、多角的な考え方、C. メタ認知、D. 個別最適化、E. 語彙力・表現力の育成、F. 文章添削・校正・評価] 6 つのカテゴリーに分類しています。各教科で「何のために生成 AI を使うのか」を明確にし、授業設計を行っています。



［写真２:生成 AI 活用のねらいに沿った授業検討の様子］

授業実践においては、教師が意図的にデザインした「プロンプト（AI への指示文）」が重要な役割を果たしています。生徒が AI と対話する中で、単に答えを得るのではなく、より深い思考へと誘われるような仕掛けが各教科等の授業設計に組み込まれています。これは、ICT を単なる道具として使う段階から、より本質的な教育 DX へと進んだ姿と言えます。現在、同校ではこれらの成果を公開授業研究会等で発信し、「深い学び×生成 AI」の可能性を広く提示しています。



［写真３:授業で生徒にプロンプトを提示］

特筆すべき、教育 DX の取組は「教師の授業０時間目」です。授業をシミュレーションするプロンプトを活用し、教師は生成 AI が演じる架空の生徒を相手に模擬授業を行います。実際の授業（１時間目）の前に、AI 相手に発問や展開を試行錯誤（0 時間目）することで、教師の授業デザインカや対応力を高めています。

３．今後の展開

中野中学校の挑戦は、一中学校区の取組にとどまるものではありません。今後は、これらの実践で得られた知見や成果を、市内全域へと「横展開」していくことが期待されています。

重要なのは、ツールを使うこと自体を目的にしないという点です。「何のために ICT や生成 AI を使うのか」という原点に常に立ち返り、あくまで「生徒の学びを深めるため」「教師が子どもと向き合う時間を生み出すため」という目的をぶれさせないことが、普及の鍵と考えます。

中野中学校が切り拓いた道は、これからの相模原の教育、ひいては日本の教育のスタンダードとなっていく可能性を秘めています。そこには、テクノロジーと人間味あふれる対話が融合した、学校の姿がありました。